

OSHIMA MAP

大島 マップ

香川県高松市、大島。高松港から船で約30分。

白い砂浜が広がる美しく穏やかな瀬戸内海に囲まれた島です。
島には、ハンセン病回復者が暮らす国立療養所大島青松園があります。

「大島マップ」は、大島を訪れた人々が島や療養所の歴史を知り、
島の豊かな自然に出会えるようにという願いをこめてつくりました。

何度も大島へ渡っている人も初めての人も、
季節や時間、誰と訪れるかで会うものも変わります。
ぜひこの「大島マップ」を手に取り、大島をじっくりと歩いてみてください。

高松市

Miyawaki Shintaro



大島の歴史——

大島は、2つの小島が砂州でつながって現在の形になりました。大昔から人が住んでいて、弥生時代以前の石器が島内で発掘されています。800年以上前、いわゆる源平合戦の「屋島の戦」で源氏に敗れた平家が彦島（下関市）に逃げる途中、仲間を埋葬した場所に植えた「墓標の松」が現在も残っています。

国立療養所大島青松園——

1907年、ハンセン病患者を療養所に入所させるための法律ができました。この法律が施行される1909年、全国5カ所に公立のハンセン病療養所が誕生しますが、そのうち中国・四国8県が連合して設立したのが第四区療養所です。1910年には大島療養所と改称、1941年に厚生省（当時）に移管され、国立らい療養所大島青松園となりました。1946年、国立療養所大島青松園と改称し、現在に至ります。全国に13ある国立ハンセン病療養所のうち、離島全体が療養所という特徴を持つのは大島青松園のみです。



白砂青松の美しい大島



多いときは700人を超える入所者が住んでいた



春には桜並木の下でゆっくり散歩してみても



瀬戸内国際芸術祭では毎回約5,000人が島を訪れる

国立ハンセン病療養所の所在地



「ハンセン病」とは——

ハンセン病は古代からあった病気で、感染症の一つです。近代まで化学的な治療法が見つからず、外見でわかるところに病気の症状が出ることから、恐ろしい伝染病、遺伝病などと誤解され、長い間、患者やその家族は社会の偏見に苦しめられました。かつての呼称「らい」、「癩」などは、偏見・差別を悪化させるものとして使用せず、現在は病原菌である「らい菌」発見者の名前をとって「ハンセン病」といいます。らい菌は感染力が弱く、感染しても発病することはまれです。また、全国の療養所入所者は全員、既に治療を終えた「回復者」で「患者」ではありません。

大島の現在——

日本のハンセン病患者隔離政策は、1996年に「らい予防法」が廃止されるまで約90年にわたって続きました。法律廃止後は、ハンセン病問題への正しい理解を深めるための人権学習や入所者との交流のために大島を訪れる人が年々増えています。また、瀬戸内国際芸術祭の会場の一つとして、幅広い層の人々に親しまれています。2019年には、大島～高松航路が一般旅客航路となりました。



1 墓標の松

今から約800年前、1100年代(平安時代末期)に起こった源平合戦の「屋島の戦い」に敗れた平家軍が、武者の墓をつくり松を植えた。これらの松が「墓標の松」として今も残っている。老松の下からは人骨、刀剣などが発見された。5m以上の高さのある松が今も立っている。昔は今よりももっとたくさんの松が山にも港付近にもあったと入所者は語る。



3 納骨堂

開所当初は納骨堂がなかったため、「南無佛」碑にお骨が納められた。1936年、初代の納骨堂が完成し、2003年、現在の納骨堂に建て替えられた。1909年の開園以来、合わせて2,155名(2021.3.1現在)の入所者が亡くなっている。現在の納骨堂には、1,450名のお骨が納められている。家族と縁を切っている入所者も多く、亡くなったあとも引き取り手がないお骨や分骨を希望した人々のお骨が納められている。全国の療養所すべてに納骨堂がある。療養所といいながらも、退所規定はなく、ここで一生を終えることが前提であった。



2 野島記念公園(心月園)

長く勤めた三代目園長(1933年～1969年)野島泰治氏(1896年～1970年)を記念して1972年に完成した公園。その碑文から「心月園」と呼ばれ親しまれている。夏には、青松園主催の夏祭りが毎年この場所で開かれ、島内外の多くの人で賑わう。松越しに見上げる大輪の花火は見事である。



4 納骨堂の隣にある3つの石碑

「南無佛」
1909年の開所から1936年に初代納骨堂が建てられるまでに亡くなった674名のお骨が納められている。

「鎮魂の碑」
療養所内での結婚は許されていたが、子どもをつくることはできなかった。結婚すると男性には断種手術が行われた。妊娠した女性(入所した時点で妊娠している場合もあった)には人工中絶が強制された。生まれてくることのできなかった胎児のための慰霊碑である。

「小林博士の碑」
大島療養所二代目所長の小林和二郎氏(1911年～1933年)の慰霊碑。医師として初めて所長を務め、島で生涯を閉じた。初代所長は警察官僚だったため、小林博士こそ真の初代所長と慕う入所者も多かった。



5 宗教地区

1935年に建てられたキリスト教霊交会の教会堂などの建造物が並ぶ一帯は宗教地区と呼ばれる。入所者は入所後、それぞれが信仰する宗教に属し、心のよりどころとしてきた。かつては金光教会堂、仏立宗講堂もあったが、信者がいなくなったため、建物はすでに取り壊されている。

7 石仏・ミニ八十八カ所

大島青松園と四国八十八カ所は縁が深い。療養所開所当時は、ハンセン病が発覚して家族のもとを去り、四国遍路の旅をしている途中で大島に収容された入所者も多かった。島内のミニ八十八カ所霊場の石仏は、大正時代の初め頃、香川県三豊郡(現・三豊市)にある本山寺の住職等によって寄贈された。大島にいながら四国八十八カ所巡りができる。当初は北の山を四国に見立て、山道を一周して巡るようにしていたが、1956年参拝しやすいようにと安定した場所に移され、現在に至る。



8 風の舞

1992年、入所者、職員、高松市・庵治町の人々など、延べ約1,000人のボランティアによってつくられた。「せめて死後の魂は風に乘って島を離れ、自由に解き放れますように」という願いが込められ「風の舞」と名付けられた。三角錐のものは「天上・宇宙の万物」を、円錐台(プリンのような形)のものは「天下・地上の万物」を表している。これら2つのモニュメント内には、亡くなった方を火葬して納骨した後の残骨が納められており、その周囲には四国4県を表す東西南北の印とともに、各県の特産である石が敷かれている。これは、大島青松園は四国出身の入所者が多いためである。また、円形の石畳は「死者と生者が語り合う場所」を表す。



6 大島神社

初代大島神社は、1940年に完成したが、第二次世界大戦後、GHQの命令により解体された。その後、1965年、北の山の中腹に再建。2017年、宗教地区の金光教会堂跡地に遷座され、新社殿が造営された。



9 火葬場

大島で亡くなった入所者は、この火葬場で火葬される。かつては、火葬も患者作業のひとつだった。開所後すぐに火葬場はでき、改装、新築により薪やオイルバーナー式へと火葬の方法も変わっていった。現在の火葬場は2001年にできた。全国のハンセン病療養所で園内の火葬場が現役で稼働しているのは、今は大島青松園のみである。



11 入所者が住んでいた寮

1982-83年に建てられた長屋形式の軽症者用の寮。自立した生活が可能な入所者が住んでいた。現在はバリアフリーの居住区域に住んでいるため住人はいないが、畑や盆栽などの世話をするために入所者が日々通っている。空部屋を活用して、瀬戸内国際芸術祭のアート作品が展示されている。建物の配置や呼び方(8寮-17寮など)は、1940年頃からあまり変わらず、当時の入所者の暮らしの面影を残している。



10 解剖台

大島では療養所に入所するとき、「死後、遺体を解剖することを承諾する書類」への署名が求められたことがあったという。解剖室を解体したときに解剖台は西海岸に埋められた。瀬戸内国際芸術祭2010が始まる直前に波打ち際で約30年ぶりに発見され、入所者との相談の結果、引き上げ、展示している。



12 大島会館

島外からの訪問・見学の方々との交流や、ハンセン病に対する啓発・理解を深める活動の場として使われている。また、入所者の楽しみの1つであるカラオケやコンサートなどのイベント、島内喫茶室等、福利厚生施設として様々な有効活用されている。



13 社会交流会館

3つの展示室と図書室を備えた資料館機能、入所者への面会に訪れた人のための宿泊施設、多目的ホール、「カフェ・シヨル」(瀬戸内国際芸術祭の作品)などがある複合施設。大島を理解する学びの場であると同時に、大島に関わるすべての人々(療養所入所者、職員、来島者など)がつながり、交流する拠点となっている。写真は大会館とつながるカフェ・シヨルに近い入口。讃岐弁「よってんまい」(意味は「よってみて」)の看板は、アーティストの田島征三氏がワークショップで大島の浜辺で集めた素材を使って子どもたちと手作りのもの。



貯水池

大島は湧き水や真水が出る井戸が少なく、生活水に苦労してきた。1937年に香川県土木課の事業として貯水池が完成した。島の水事情改善に向けた転機となる。南の山中腹の等高線に沿って集水路がめぐられ、貯水池に水が溜まるようになっている。1965年、庵治と大島の間に海底送水管が設置され、四国本土からの給水が実現するまで、井戸水とともに入所者の命をつないでいた。現在は、一般来島者の見学を中止している。

入所者にはハンセン病治療の遅れや後遺症のため、目の不自由な人が多い。

園内には、こうした人々のために以下のものが設置されている。



盲導鈴

島内の分かれ道や建物の前などには盲導鈴と呼ばれるオルゴール音が流れるスピーカーが設置されている。曲は「ふるさと」と「乙女の祈り」の2種類。かつては鈴がつけられていたようだ。



盲導線

白い線は、車道のセンターラインではなく、視力の弱い入所者ではなく、歩行できる道だと分かるよう引かれたもの。弱視の方も盲導鈴と盲導線を手がかりに歩くことができる。



盲導策(柵)

目の不自由な人が杖で道を確認しながら歩くための柵。昔は杖を持って一人で歩いている入所者の姿があったが、今はほとんど見かけない。

Oshimagram

～大島を歩いてみつけた景色～



松と青い空

大島から見える空は高く、遮るものがないのでとても広く感じる。たくさんある松と青い空が美しい。



まっすぐな盲導線

昔の寮が立ち並ぶ北のエリアには、まっすぐ続く盲導線。時々この線を頼りに散歩する入所者を見かける。



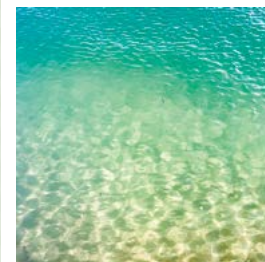
いつからいるの？

あまり見たことのない形のポスト。どっしりしていて思わず触ってみたいくなる。今は社会交流会館の入口にある。



ゴツイボディが頼もしい！

大島の消防車を発見。レトロな雰囲気も漂い、カッコイイ形をしている。でも出動しないことが大事な仕事。



まるで南の島！

瀬戸内海の海ってこんなにキレイだったっけ？と思うくらい、透き通った海は南国の島にきたみたいな感覚に。



現役で使用

大島のあちこちにある電話ボックス。中をのぞいてみると、園内専用の電話機がある。いたずらしちゃだめよ。



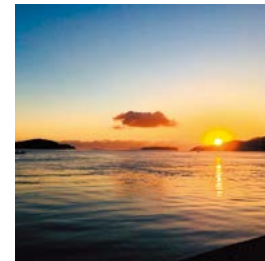
ドアノブの自助具

北側のエリアにある入所者が住んでいた寮の入口。ドアノブが開けやすいように工夫されている。



なんでもあります

売店の壁には、地元の大学生が描いた人や野菜、果物などの絵がある。可愛くて思わずバシャリ。



今日がはじまる

東の浜からは朝日が見える。眩しくて美しい朝焼けを眺めていると空がグラデーションに変わっていく。



園内放送がなかった頃、鐘を鳴らして時報や集会の合図として知らせていたそう

人権学習、交流の拠点としての社会交流会館

大島の歴史を知り、 人々が交流する場として

社会交流会館の建物はかつて入所者の住まいだった建物を改築したものです。2016年のプレオープンを経て、2019年4月、3つの展示室と図書室が完成、グランドオープンしました。1つ目の展示室「導入／ギャラリー」では、ハンセン病に関する基礎的な知識を学べます。また、入所者が手掛けた作品展示を見ることが出来ます。2つ目の展示室「歴史展示」では、「生きる ～支えあって、生きてきた～」というメッセージのもと、入所者の「生」を中心に、「生きる」ために必要だったこと、「生きる」支えとなったことをあらかわす6つのキーワード（「入る」「集まる」「祈る」「働く」「熱中する」「眠る」）を挙げ、それぞれに関係する実物資料や写真などを展示しています。例えば「祈る」では、入所者の心のよりどころとなった宗教について、



ジオラマは1958(昭和33)年前後の大島を150分の1サイズで再現。マップの ■ マークは、ジオラマ・写真と連動している。



入所者が実際に八十八力所巡りをした証の掛軸

「熱中する」では、入所者が結成した劇団や楽団、クラブ活動について展示・解説しています。3つ目の展示室では、1958(昭和33)年前後の大島の姿を150分の1スケールで再現した迫力あるジオラマを展示しています。この時代を選んだ理由は、戦後、日本再建を目指して盛んになった「無らい県運動*」の結果、多くのハンセン病(と診断された)患者が収容され、大島青松園の在園者数が第2のピークを迎えた時からです。明るく開放感ある図書室では、これまで入所者自治会蔵書として大切に読み継がれてきた本のうち、ハンセン病に関するものを中心に配架しています。また、貴重書の展示も行っています。

*無らい県運動…1929(昭和4)年頃から始まった国と一般市民がなって行った一体運動。各県が競ってハンセン病患者を見つけだし、療養所に隔離・収容した。

多くの人々が訪れ、 後世につなぐことを願って

社会交流会館は誰にでも開かれた場所です。ここを訪れた方たちは、誰でもハンセン病に関する正しい知識や情報を得ることができます。大島がどんな歴史を背負いそして歩んできたのか、それらを後世に伝えるための大切な場所です。訪れた人々が大島やハンセン病の歴史から学び、同じ過ちが繰り返さない世の中を築いてくださることを願ってやみません。



入所者がゲートボールや菊の品評会で得たトロフィーなども展示されている



入所者が尊敬する医師の名をつけて収集した本がずらりと並んだ書籍



カフェ・シヨルは島内外の方の交流の場となっている



高松市の取り組みについて

高松市は、大島の総合的な将来ビジョンとして、2014年11月に大島振興方策を策定しました。「入所者の意向の尊重」「国有資産の有効活用」「有人島としての存続」「大島の特性を生かした振興」を基本方針として、大島の振興に取り組むこととしております。

「歴史の伝承」「交流・定住の促進」の2つの方向性を定め、それぞれに対して具体的な施策42項目を掲げています。ハンセン病に対する正しい理解のための人権学習や現地学習会の開催、瀬戸内国際芸術祭を通じた島外との交流や芸術家の創作活動の場の提供など、より多くの方に大島を知ってもらうための取組を推進しています。これまでに、子どもが大島に宿泊しアーティストや入所者との交流を深めることのできる子どもサマーキャンプを開催したり、ワークショップを実施したりしています。また、大島の今を発信する情報誌「大島レター」の発行(年2回)、月1回の園内限定「大島アワー」の放送など継続的に大島に関わっています。

今後も大島青松園入所者自治会と共に、大島の振興に取り組んでまいります。



入所者から昔の話を聞くワークショップ。貴重な話を聞くことができた



子どもたちのサマーキャンプ。歴史を学ぶところからスタートする

瀬戸内国際芸術祭と大島の関わり

2010年に始まった瀬戸内国際芸術祭。会場が正式決定する以前の2007年から、入所者の皆様のご意向を伺い、また、やさしい美術プロジェクトの高橋伸行さんに島へ通ってもらったりして、芸術祭への準備を丁寧に進めてきました。「多くの方が大島を訪れ、記録・記憶を伝えること」という入所者の希望に伴走し、様々な活動が大島で行ってききました。

3年に1度の芸術祭本祭では、田島征三さんや山川冬樹さん、鴻池朋子さんらアーティストたちがアート作品を発表しています。また来島者と入所者がともに集うカフェ・シヨルや、大島の歴史やハンセン病の理解促進のための大島案内は通年で行っています。さらに芸術祭の大切な取り組みの一つ「島間交流」では、他の島の島民との交流を深めています。芸術祭のサポーターのこえび隊は、芸術祭期間中はもちろん、通年での大島のさまざまな活動にも積極的に参加し、来島者と入所者の橋渡し役を柔らかに担っています。

瀬戸内国際芸術祭をきっかけに、多くの人が大島を訪れるようになりました。引き続き大島のみなさんの気持ちに寄り添いながら活動を広げていきます。



Ichikawa Yasushi

島に唯一遺っていた木造船を展示。入所者が束の間の自由を求めて海へ出て、魚釣りなどを楽しんでいたそう



1日3回の大島案内をこえび隊が行う



こえび隊は通年で大島に通い、入所者との交流を続けている

昔の大島写真館

この写真に写っているのは何だろう？

入所者さんと一緒に昔の写真をじっくり見ているといろんな発見がありました。

*各写真はMAPとも連動しています。

P1 すいかの品評会



1955年頃に礼拝堂で行われた、入所者が生産したすいかの品評会。そこで選ばれたすいかは、返礼品となったそう。高知県から贈られた苗を使って栽培していた。

P2 大島の水事情

ジオラマ 5



入所者の寮にはそれぞれ井戸はあったが、海水が混ざってとても飲める水ではなかった。唯一、飲み水として使われていた貴重な井戸に、入所者がバケツを持って並んでいる。

P3 豚舎

ジオラマ 2



「風の舞」の場所には1979年まで豚舎があった。養豚は1931年、入所者自治会の事業として始まった。多い時には約200頭の豚を育てていた。繁殖から屠殺までを入所者が行っていたそう。給食に提供したこともあったとか。

P4 相愛の道

北の山を一周できるようにと1933年に入所者が遊歩道を作った。天気がいい日にはよく散歩をしていたそう。春になると桜やツツジが咲くそう。



P5 島の燃料

1950年代まで燃料として薪や木炭を使っていた。購入した薪は船で東の海岸まで運び、入所者の手によって各寮へ運ばれていた。薪割りや運搬なども入所者の「患者作業」として割り当てられていたそう。

おすすめ ハンセン病関連 本コーナー

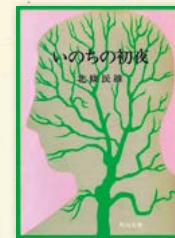
たくさんあるハンセン病関連の本のうち、6冊の本を選びました。

これらの本と出会い、読んだ方の世界や風景が少しでも広がったという想いで紹介します。



『砂の器』(新潮文庫)
松本清張

松本清張の長編推理小説。1974年に映画化され、その後もリメイクしてテレビドラマ化されています。ハンセン病の父親の存在を隠し通すべく、ついには殺人を犯してしまう息子。不治の病と忌み嫌われ業病とも言われたハンセン病。差別という非条理で無情な世界を描く中に垣間見える、人間の苦悩が読むものをとらえます。



『いのちの初夜』(角川文庫)
北条民雄

20歳で東京にある多磨全生園に入所した北条民雄は、手記風にまとめた私小説『いのちの初夜』で一躍その存在が知られるようになりました。ハンセン病の療養所に初めて訪れ、そこで暮らすことになる一日目の体験。この作品は川端康成の手を借りて世に送り出されたことでも知られています。23歳で結核のため天逝。



『記憶の川で』(編集工房ノア)
塔和子

13歳の時に国立療養所大島青松園に入所した塔和子は、多くの詩集を世に送り出し文学界でも高い評価を得ています。32歳のときに第一詩集『はだか木』を刊行。1999年には詩集『記憶の川で』で、詩の世界では最高峰ともいわれる高見順賞を受賞しています。2013年の逝去まで大島で詩を書き続けて過ごしていました。



『あん』(ポプラ社)
ドリアン助川

桜通りという商店街にある、どら焼き店の店主・千太郎の前にアルバイトの求人を見て高齢の女性・徳江が訪れます。生きることに悩んでいた千太郎は、ハンセン病回復者に出会うことにより人生の意味を問い直します。偏見により社会から締め出されてきた徳江が伝えたかった、生きる意味とは。2015年、河瀬直美監督のもと、映画化されました。



『明石海人歌集』(岩波文庫)
明石海人(著)・村井紀(編)

明石海人は静岡県沼津市出身の歌人です。元は教師であり、幸せな結婚生活を過していました。25歳の時にハンセン病を発症、明石楽生病院に入院しますが、病院の閉鎖にともない1932年、長島愛生園に入所、作歌活動に精進します。1939年に発行した歌集『白描』はベストセラーとなりましたが、それから約4か月後、腸結核で37歳の短い生涯を閉じます。



『わたしが棄てた女』(講談社文庫)
遠藤周作

ハンセン病と診断された森田ミツの一生を描き、男女の仲だった吉岡努の視線とミツの視線、二つの視点で物語は描かれています。ハンセン病が誤診と分かった後も、患者としてではなく修道女たちを手伝うために病院へと戻るミツ。吉岡はそんなミツが気になり年賀状を送りますが、その返事から彼女が交通事故でこの世にもういないことを知ってしまいます。



高松港から船で約30分
面積 0.62km² 周囲 7.2km



大島で過ごすために確認する 5 つのこと



大島は島全体が国立療養所大島青松園です。大島に着いたら、以下の5つのマナーやルールを守り、見学や散策をするようにしよう。

- ① 船便は限られています。事前に大島青松園のホームページで船の時間を確認しよう。
- ② 入所者のプライバシーを守るため、生活区域には立ち入らないようにしよう。
- ③ 写真撮影は、建物や風景のみ可能です。入所者や職員の撮影は行わないようにしよう。
- ④ ゴミが出たら、島に捨てずに各自持ち帰ろう。
- ⑤ 島の人に出会ったら、元気にあいさつをしよう。